徳島福祉リサイクル
かわらばん
【創刊号】
太陽と緑の会・徳島福祉リサイクル／〒779-31徳島市国府町南岩延／☎〇八八六（四二）一〇五四／毎月五日発行

「ご挨拶」　近藤文雄

福祉リサイクルは発足以来、市民の皆様方の温かいご支援のお陰で漸く軌道に乗ることができました。厚く御礼申し上げます。リサイクルの目的は、度々申し上げましたように、人も物も大切にする住みよい社会を創ることです。

今、我々は大変豊かな物質生活と平和を享受しております。こんな豊かな時代は日本の歴史上嘗てないことですが、その反面、我々はそれに馴れすぎて、感謝の心や弱い人をいたわる心を忘れ、平和への努力を怠りがちであります。

消費は美徳というコマーシャリズムに躍らされていると、資源を浪費し、環境を破壊して、人情は薄れていきます。今、世界の人口は五十億ですが、それはいづれ百億、二百億となるでしょう。今でも世界には飢えた人々が何億といるのに、人口が今の二倍、三倍となったら、また、気象に異変がおこったら、世界は忽ち飢餓状態になるでしょう。我々は子孫のために資源とよい環境を残しておかねばなりません。それはそれとして我々は人にも物にも感謝し大切にする心がなくては幸せになることはできません。平和な世界を築くのは軍備でなくて、人々が互いに扶け合うことで、なかんづく、弱い人々を皆で守っていくことであります。

リサイクルは物に感謝し、物を大切にして使えるだけ有効に使うことです。もう要らなくなった人から頂いて、再生し、それを必要とする人に使って貰うのです。その仕事を心身に障害を持つ人々とともにしながら、それらの人々がそれぞれ所を得て、いきいきと暮らせるようにしたいと願っています。市民の皆様も何卒ご協力下さいますようお願い申し上げます。

福祉リサイクルイメージ　杉浦　良

私が徳島に住んで四年近くになります。福祉リサイクルも同じ期間、活動してきました。何故、こんな活動を始めたのかとよく聞かれます。学生時代から今迄に出会った人達の中で私自身が非常に影響を受け、また自分の生き方を考えさせられた人と言えば、特に柳沢寿男監督と近藤文雄先生があげられます。アプローチの仕方が違えど、御二人共、七〇歳という年齢を感じさせない豊かな想像力と精神の柔軟さにいつも頭が下がります。私が方向を見失ったり、絶望を感じたり投げ出したくなったりしながらも、唯一、ボンヤリとこんな感じでやりたいと思うようになったのも、二人の存在をぬきにして考えられないと思います。

地域社会の中で、いろいろな人達（障害があるなしに関係なく）が相互関係を基盤に、なるべくいきいきと生きれる空間を創り出していくことで、いろいろな問題を解決する糸口が見つかるのではないか。こんな漠としたイメージを具体化してゆく中で（現実的には様々な問題があり限界も出てきますが）、福祉リサイクルという形が出てきました。

相互関係を基盤にするというのは、単に社会的弱者に手をさしのべるという事だけでなく、地域の中で相互に存在価値を認め合うということです。それぞれがやれることを（能力的に差があるのは当然ですが）やりながら、人と人との関係を認め合い拡げてゆく事。生き生きと生きるというのは、一人一人が本当にやりたい事を見つけ出してゆくという過程の中で自己実現をはかってゆく事、それが一人一人の信頼関係にまで繋がってゆく事だと思っています。

この事を私は二人の（言葉だけとか行動だけという事ではなく）存在を通して学んできたように思います。

この福祉リサイクルの活動を（不備な点は非常に多いと思いますが）機関紙を出し、皆さんに開示してゆくなかで高めてゆければと思います。

協力者名簿　［六月］
＊敬称は省略させていただきます

＜回収＞
国府町　長谷川、鈴江、岡本、井上、藤川、高瀬、井原
川内町　真鍋、
南前川町　姫野、大門、
上助任町　坂東、
住吉　高田、富川、松浦、
中徳島町　後藤田、板東、
新内町　山下、
入田町　吉村、
通町　いせや、
南島田町　笠井、
かちどき橋　関本、
吉野町　東、久東、
城東町　武市、
徳島本町　喜田、
南蔵本　山本、
万代町　バン
沖洲　木下、笹本、
沖浜町　アカホ家具、板東、
佐古　尾形、吉島、
秋田町　石立、
新浜本町　豊内、
富田橋　宮崎、清家、岩崎、
地蔵橋　伊勢、
徳島町　徳島ビル、高橋、
二軒屋　宮本、
昭和町　宮下、山西、遠藤、
南矢三　須摩、
徳島駅前　古川、
新蔵町　山川、
名東町　西村、
上八万町　鶴島、
庄町　美馬、
中常三島町　日野、
福島町　天野、
八万町　谷口、久保、
中央通り　庄野、
南内町　田中、
鴨島町　宮内、岡本、
鳴門市　四宮、浜、
石井町　加藤、友成、
出来島本町　徳島暮らしをよくする会、鈴江、

＜持ち込み＞
徳島市　森実、森、坂東、瀬ノ上
日野、門田、大島、儀間
香川、山花、友成、
小松島市　井村、
藍住町　平池、松浦、小笠原、
阿南市　林、
石井町　牛辻、藤本、
鳴門市　溝田、
板野町　明石、
大阪　土井、

＜寄付＞
佐古　尾形　五千円

徳島県にボランティア

徳島県には、昭和四六年に「太陽と緑の会」というボランティア組織が創設された。医師近藤文雄を中心として、筋ジス患者の支援及び、研究所設立を目的としたものだった。

その近藤が五八年、映画監督柳沢寿男を介して杉浦良を知った。この時、杉浦は二九才、大阪下町で知恵遅れ成人とともに働いていた。近藤は杉浦を徳島に呼んだ。

八月、杉浦は近藤の案内で、活動の拠点となる「月の宮」の窪地に立った。そこには、養豚舎として使われていた鉄骨の建物が野晒しだった。草の息でむせかえるようだった。この一帯の整備には、太陽と緑の会を幹としたボランティアの協力があった。二ケ月後、月の宮作業所として姿を変えた。ここに、視覚障害の名田が住み込んだ。

資金難、スタッフの変動などはあったにせよ、徐々に市民の協力の輪が広がった。現在、福祉施設や養護学校生などの園外実習も行っている。そして月一回のバザーへの市民の関心も大きくなった。六一年七月、公・民からの大きな支援を受けて国府店を開いた。回収品を一挙に販売する場所ができ、活動は飛躍的に前進した。ここにスタッフが住み込んで、共同生活もはじまった。

以来、県内外からの見学者も増えた。杉浦を中心として、常に活動を見直してゆこうと、スタッフ会議もはじまった。

六三年六月、国府店で五名の障害者が共同生活し、それを中山、荒川が支えている。中山には職場災害の後遺症がある。荒川は、青年奉仕協会より派遣されたボランティアだ。それぞれが持ち味を発揮してほしいと、杉浦は遠目にみている。

現在、柳沢の指揮で、ビデオ映画の撮影がはじまっている。ドキュメンタリーとして、徳島福祉リサイクルの活動が整理されていくだろう。市民の観賞に耐える内容の記録映画をと、スタッフは意気込んでいる。

不用品の処分

不用品、あるいは引っ越しなどで処分する物品がある場合、国府店へ電話をしていただく。するとスタッフが回収にでかける日時の打合せを行う。何日の何時頃、そしてどんな品物かということを聞く。我々は、軽、一t、二tのいずれかのトラックで出向いてゆく。その回収品を質によって、区分する。すぐ役立つ物は掃除、磨きをし、値段を付け店頭に並べる。家具や電化製品の傷んでいる物は修理する。修理不可能な物は解体して、鉄屑をとる。そして、一升瓶、ビール瓶、雑誌、新聞紙、段ボール等とともに業者に届ける。

今の社会は、不用品の処分に金銭がかかる。我々はそれを無償で行う。店に不用品を持ってこられる方もいる。もちろん、それも結構だ。ただ、我々は大規模なゴミ処理設備を持っていない。再生可能な物を優先してほしい。

回収品を眺めてみると、実にさまざまだ。どんな人がどんな思いで使ってきたのだろうと思う。衣類にはひときわそれを感じる。二階にそのコーナがある。着用の無理な物は、ウエスとして、業者に送る。こうした事が、我々の日常活動だ。

『インフォーメイション』

＊福祉リサイクル運営内容概略（一箇月）

「収入の部」

・国府店売上……七五万
・定例バザー売上…十五万
・小規模授産施設助成金……約十万
（年間徳島市六五万・徳島県六五万・計百三十万）
総計　約百万

「支出の部」

・給料……五五万（スタッフ十一人分）
・昼食及び朝食、夕食、コーヒー代等……十五万
・車維持費（燃料、車検、保険等）……十万
・修理材料費（修理パーツ、工具他）……五万
・水光熱費、通信費、月の宮作業所土地代、国府店土地代……十万
・雑費……五万
総計　約百万

＊国府店二階部屋造り協力者

川内町、林一義・芳次郎様、矢田政恵様より五十万の寄付を受け材料を購入し、入田町、笠原義春様、八万町、中山・小林様の協力により、一ケ月間で完成しました。

本当に有難うございます。

＊福祉リサイクル国府店の足跡

昭和六十年十一月　徳島市より旧東庁舎を無償で譲り受ける。
六一年　二月　笠井仏壇社長、笠井氏より土地を貸与される。
六一年　六月　徳島県建設業協会徳島支部長、赤松氏の協力で、無償で建築、完成する。

＊福祉リサイクル国府店の営業時間

午前十時～～午後六時（水曜日定休）

なお、回収は、土曜日定休。

＊販売品目……家具、電化製品、衣類、雑貨、食器、古本、玩具、アンティック等（新品で定価の三分の一を上限とし、五分の一から十分の一を基準とする）。

＊定例バザー

場所……富田浜二丁目・近藤整形外科駐車場（建設センター隣）
日時……毎月第四日曜日
午前十一時より。雨天決行

＜徳島市よりいただいた放置自転車を修理・再生して販売します。約二〇台。＞

＊太陽と緑の会例会

場所……近藤整形外科四階・太陽と緑の会事務局
日時……第二・第四木曜日、午後八時より。

「福祉リサイクル一日体験レポート」

杉浦　良

朝、目が覚めると、陽射しが眩しい。部屋の外で電話のベルが鳴る。ダダダッと足音が聞こえる。名田のオトッツァンだ。

「え～～とネ、一〇個、お願いします」国府給食から、昼食のおかずの注文だ。

そろそろ、九時半。私はジーンズをはく。二日に一度、泊まり込んでいる。店の開店時間は一〇時から六時。それに合わせて、作業をしている。そのため、普通の施設や作業所と比べると、朝は遅い。一階に下りると、すでに岡本君の姿はない。河川敷を開墾した畑に出ている。多分、草とりと、カラスにやられたとうもろこしを見に行っているのだろう。井口君が炊事場で湯を沸かし、ポット五つに入れている。宮本君が、ゴミ箱を集めている。テーブルでは、小川君がテレビを見ながら、パンを焼いている。隣では、一〇センチほどに新聞を近づけ、卵飯をかけこんでいる名田さんの姿がある。外では、昨日の晩、回収したタンスをトラックから降ろしている姿がある。長野から来た一年間ボランティアの荒川君だ。「おはよう」と、お母さんがやってきた。昨日は深夜まで、ワープロの練習をしていた。機関紙を出すためだ。

私はパンを一枚焼き、ストレートのインスタントコーヒーを飲み干す。ボチボチ仕事だ。

「名田さん、今日の回収は？」荒川君が名田さんに電話の指示。回収カードに目をやり、電話をかける。

「福祉リサイクルです。えーとネ。今から出かけますので。量の方は。ハイ。失礼しま～す」緊張するとドモってしまっていたが、今はほとんどわからない。人選の結果、荒川、名田、井口のゴールデンコンビが、走行距離一六万五千キロのイスズエルフ二トンに乗り込む。レジのところの机で、拡大鏡を片手に、市内地図を見ている名田君。レジから二トンの鍵を出す井口君。

「今日はオボッチ（井口君の愛称）か。二階からようけ、おろさんといかんのに、戦力不足やなあ～。ほな行ってきます」

「オトッツァン、今日はワシがおるから、ゴールデンコンビやろ。嬉しいわな～」デコボココンビの出発場面に、

「しっかりやっておくれでないかい」と、荒川君、一言。

養護学校に通っているジュン君がやってきた。学校が終わってからと、休みの日に、自転車でやってくる。

「おはよう」と言うと、「おはよう」と言いにくそうにボソッと返事がある。

宮本君、小川君、ジュン君は、一階二階の掃除にとりかかる。市からいただいた七〇坪二階建ての建て物は、掃除だけで時間がかかる。中山君がテーブルの上に、五、六種類の薬を出し、コーヒーと一緒に飲んでいる。

「ウドン粉ばっかり、よう飲むなあ―」

「よう言うわ」頸椎を痛めたため、血液の循環を良くするものらしいが、量が余りにも多いので、皆はウドン粉と呼んでいる。

「カラスがナンバをみなつついて。鉄砲で撃ち落とさんとあかんわ。テープでヒラヒラ作ったのにあかん。むいて、食ってやろか」長靴姿で手に鎌を持っている。岡本君だ。

「どうでもいいけど、息子が風邪ひくぞ」

「こんな暑いのに、風邪ひくか」と、ズボンのファスナーを閉める。

「親方。（私のことを親方とか大将と呼んでくれる）バザーが近いのに、自転車がようけ出来とらん。ケツ追っかけんといかん。自転車が売れんと、ひやく（給料のこと）が減るしのう」

私は自転車の修理。岡本君、ジュン君、小川君は、自転車磨き。サンドペーパー、ワイヤーブラシ、スティールウールを使い、荒磨きをする。後輪を新品のタイヤチューブに交換。前後のベアリング、クランク、車輪の振り取りをし、カゴを新品に交換。ライトの接点磨き。ブレーキ、ハンドルのガタを調整。前輪の虫ゴムを交換。ベルと鍵を付ける。チェーン張りとオイルさしをして完了。試乗をして、〇Ｋ。

「岡チン（岡本君の愛称）、最終磨きだヨ」シンナーとワックスを手に岡本君がやってくる。外では、中山君、宮本君が冷蔵庫の解体をやっている。現在、冷蔵庫、洗濯機は解体し、プラスティック、断熱材を取り除かないと、鉄屑屋さんに運んでいっても、タダでさえ、とってくれない。一台に一時間をかけて解体し、トラックで運び、一台四〇円ナリ。これも福祉リサイクル。

母さんが、七・三の麦入り御飯を炊き、味噌汁を作っている。全員そろって、昼食の時間だ。テレビでは、ＮＨＫの連続ドラマが流れている。

「この子は、どうして、こうなったん？」

「見合いをして、ことわったんだけど、たまたま、一緒の所でおるようになったんや」名田さんと小川君が説明してくれる。二人はテレビ博士ということで一致している。二人共、過去において人と対話することよりも、テレビやラジオの世界に浸っていることにウエイトが置かれていた。

宮本君が凸レンズの眼鏡に手をやりながら、三杯目の御飯をかきこんだ。白内障で水晶体をけずったためだ。膝にサポーターをつけている。小児性関節リュー マチの影響か。家庭的な問題のためか、やせの大喰いだ。

休憩中に、岡本君がジュン君の大事な所を触ろうと、ジャレあっている。ジュン君には声を出しての会話がない。ただ、ジャレあっている時の表情は生き生きしている。

「オボリーン（井口君のこと）、はよおいで」名田さんの声だ。

「今日はやりとうないわ」

おいでおいでと、無理に引っぱって行く。恒例のキャッチボール。

「中山君のボロ車に球あててやるわ。あんな車に乗ったら、女にもてんわなあ～。やっぱり、クレスタのスーパールーセントみたいな車やったら、なんぼでも女がついてくるけどなあ～。それと、ワシみたいに足が長くて、顔が良く、センスもよくないともてんのや」

「ほうか、ほうか、勝手に言ってくれ。ほなけんど、オボッチみたいに、春、ジーパンの下にジャージはいて、モモヒキはく人間にはなりとうないわ」

二人がキャッチボールを始める。ボールが転がって、トラックの下へ。

「ダスコ！こんな所で昼間ボケボケ寝とったら、晩に寝られんようになるぞ」井口君の声が聞こえる。

「アホーッ、オボッチ（井口君の愛称）と一緒じゃ」名田さんの反撃。

「おまえもボケ犬やもんな。なあ、ダスコ」

ダスコとは、福祉リサイクルで飼っている雑種犬だ。二歳半になる。福祉施設の園生が内緒でかくまっていた捨て犬を連れてきた。極楽トンボの、賢いのかアホなの解らないこの犬もスッタフの一員だ。

お客さんがやってくる。常連の馬場夫妻だ。福祉リサイクルには、家具、電化製品、衣類、本、雑貨、陶器、寝具など、ありとあらゆるものがある。市民の方々からの提供だ。それを様々な市民の人達が買ってく

ださる。常連さんも多くなった。馬場さんもその一人だ。そのお客さんたちと、福祉リサイクルのメンバーたちとのコミュニケーションも出来てくる。

「みんな、元気でやってるナー。井口君、これ算用して」

「四千円と千二百円と百円です。え〜と、全部で〜」指を出しての計算がうまくいかない。

「五千三百円」と、ニコニコしながら馬場さんが一言。

「名田のオトッツァン。馬場さんが配達だって」

「ハイハ〜イ」家具の配達部隊が出動。中山、名田のシルバーコンビだ。

トラックで積んできた回収品の区分けが始まった。

「これは紙の所。これは鉄の所。これは内。これは修理に。これは焼却」私の声にみんなが動き回る。

選別後、岡本君がアルコールを片手に家具のシール取り。宮本君が解体。値段をつけた後の品物を小川君が商品として並べている。

おじいさん二人連れが散歩がてらにやってきた。駅前からバスに乗り、一キロ余り、鮎喰川の土手べりを歩いてくるのだ。

「昼間は行く所が無いからの〜」

百円の衣類を二つ買い、お茶を飲んでいただいて、帰って行く。

夕方、あけみさんがやってくる。ボランティアだ。看護婦をしている。

「嫁に〜　来ないか〜。だきついちゃろか」岡本君がいつもの挨拶をかわす。

「あけみちゃん、俺の女になれ。こういういい男はなかなかおらん」

井口君の登場。

「いやだよ〜」と言いながら、頭にコツン。太陽と緑の会のボランティアたちが、福祉リサイクルをささえてくれている。

晩七時頃に会計を締める。日計表の集計とつり銭の確認。領収書の整理、金銭出納帳。

炊事場では、私と小川君、宮本君の三人で、夕食のカレーライスの支度。皮むき器でジャガイモをむき、玉葱、人参を切る。井口君が御飯をつぎ、コップを出す。

「いただきます！」八時を過ぎた。

「岡チン（岡本君の愛称）は？」

「さっきから、おらんわ。パチンコと違うで？　今日は入るかっていよったわ」

「飯も食わんと、ようやるわ」

岡本君はここに来る前、全精力をパチンコにかたむけていた。当然、家のお金を持ち出すことになる。彼を活かす環境が無かった事も関係するのか。

「今日のあとかたづけは？」宮本君が言う。

「親方、違うで？」ニコニコと名田さん。

「風呂、入れよ〜。キレイにしとかんと、女にモテんぞ」

みんな、風呂は嫌いな方だ。いかに入らすか、難問の一つである。

井口君、宮本君がいそいそと外に出ていく。レンタルビデオを借りに行くようだ。余暇を楽しむことが難しい岡本君にレンタルビデオの道をつけた。一緒に行って、何度も本人に借り方を体験させる。今では一人でやれるようになった。

恐怖もの、一本。青春もの、一本。アイドル歌手のプロモーションビデオ、一本。二階に二人が上がってゆく。

「裸のやつもあったな」

「ようういうわ。好きやな〜」

一〇時を過ぎる。岡本君はまだ帰ってこない。この調子だと、多分、十一時頃になる。螢の光を聞いた後の御帰還だ。

「あかんわ。三つ、やられてしもうた。顔、知られておるから、出さんのやな。親方？」

「毎日、勝っとったら、パチンコ屋がつぶれてしまうわ。むこうも、商売やからな。やられた時は、千円一つか二つでやめてこんと。はよ御飯、食べ。今日はカレーや」

一階のテーブルでは、名田さんと小川君がテレビを見ている。二つのコップに焼酎の水割り。今日はどういうわけか、NHKの教育番組。二人で何やら真剣な表情。クイズ番組、歌番組、プロ野球が中心だ。クイズ番組を見ながら、二人で当て合いをしている。暗記力や勘を中心にしたものに、普通以上の興味を示している。今まで生きてきた何十年間、知っている、知らないということで、心を傷つけられてきたことの裏返しか。ただ悲しいのは、そういうことが二人の本当の実力に結び付かないことだ。言葉を知っていることと、理解するということは、全く別のレベルなのだ。

「今日は、巨人が勝ったのか？」岡本君だ。

「知らんわ」名田さんの機嫌が悪い。岡本君、井口君が巨人ファン。名田さんが中日ファン。私はアンチ巨人。中日ー巨人戦になると、大変な騒動になる。

「やった〜！原のホームラン。逆転や。中日なんか、やっつけてまえ！」

ガチャガチャとチャンネルが変わる音。

「何で〜。何んで変えるんや」

「上行って、見てこい！」

名田さんの真剣な表情に、二人はトボトボ二階に上がる。

風呂場ではゴロゴロと洗濯機の回る音。宮本君だ。風呂に入って、着た服は、そのまま洗濯機に、というのが福祉リサイクルの基本的なパターン。洗濯もせんといかんという気持ちが、ますます清潔さを遠ざける。

本のコーナーのソファに座りながら、煙草に火をつける。中山君がコーヒーを持ってやってくる。荒川君はマンガ本を読んでいる。

「オボッチ（井口君）の彼女からの電話はどう？」

「手紙を書いているようだ」

「前回の時みたいに、飛び越えて、二人で勝手にイマジネーションを膨らませ、行動に出るという感じではなさそうだ」

「まあ、動きだけはジッと見てやる必要がありそうだナ」

「そろそろ、一時過ぎ、今日は家に帰ってこんと。明日の食事の買い出しと、近藤整形に行って、売上金、渡してこんといかんしな。それから、明日からおおぎ学園の実習だ。また、一ケ月間やってくる。カマちゃんとタケチくん、期待しとるで」

「それでは、お疲れさん」

中山君は階段の下の休憩室、荒川君は二階の部屋に向かう。他のメンバーたちは、それぞれの部屋の中。

一ケ月前、福祉リサイクルを応援してくださっている大工さんと福祉リサイクルのスタッフ、ボランティアの手で完成したものだ。

「今日も元気だ。煙草がうまい」と勝手に口ずさみながら、軽トラのドアを開ける。月も星も出ていない。

「明日はやっぱり雨かナー」